

## 聞こえない拍手 ● 吉川七菜子

バリケードのような正門想像す「明日より全面立入禁止」

科目名よりも授業の方法を大きく書いている時間割

教科書がポストに届く日曜日荷台重たき春かもしれず

先生に宮崎の天気尋ねられ今日の青空見る三限目

先生もZoom初心者本題に入ることなく授業は終わる

もはやどこが上流なのか分からないコードがうねる私の机

やっぱ言うおうやっぱやめようお互いを知らないままでグループセッション

見た目とか話し方とかたくさんのお説ありヒトの第一印象

私の趣味短歌創作より友のアプリ開発注目されて

リアクションマークで反応みんな同じサイズの黄色い手を挙げている

除湿機から流れる大きな古時計四時間分の水捨てに行く

パソコンの小さな窓の中にいるA君そしてマリリン・モンロー

先生の誕生日祝うZoomにて初めて聞こえない拍手する

クリックで始まりクリックで終了一日一週間一ヶ月

まだ何も始まっていないような気がしており春学期の最終日



受賞の言葉——吉川七菜子

「あれそれとこそあと言葉多い母でももう私解読できる」

高校二年の秋、国語の授業の冒頭で松元雅子先生（宮崎歌会）が黒板に書いたのは、夏休みの宿題で提出した私の短歌でした。「解読って、なんだかロゼッタストーンの暗号を読み解いているかのようですね。」教室にいた私の心の中は嬉しさでいっぱいでした。先生のこの言葉が三年後、大学三年時に短歌の扉を開く鍵になったのです。

宮大短歌会、心の花宮崎歌会に入会し、たくさんのお刺戟を受け、短歌がどんどん好きになりました。いつも温かく見守ってくださる伊藤一彦先生、心の花の皆様は心より感謝申し上げます。